

## 気象学者のための英語 (4)\*

木原 研 三\*\*

中緯度対流圏での5日平均の大きな循環の変動は圏界面付近にも大きな影響を与えているので、逆に圏界面付近の変動を見ておれば、異常気象を起こす程度の気象現象は20~30日前から予測できる。

まず「中緯度対流圏」であるが、the mid-troposphere (通報課K氏)、the middle latitude troposphere (青森M氏)はどちらも感心しない。予報部N氏のようにthe mid-latitude troposphereがよい。「中緯度」だけなら middle latitudes または mid-latitudes (複数に注意)である。inをつけるならば in the middle latitude (高松M氏)でなく in middle latitudes である。

「5日平均の大きな循環の変動」で「大きな」は「循環」にかかるのか変動にかかるのか、はっきりしないが、多くの訳文は「循環」にかけて the variations of the large-scale atmospheric circulation observed in a five-day mean chart (予報部N氏)のようにしていた。それでいいのだろうか、なお large-scale (形容詞的用法)のハイフンを忘れないこと。

「影響を与える」は provides big influence (通報課K氏)、exert influence broadly (横浜T氏)は論外として、has great influence on (予報部N氏)は has a great influence on とする。influence は抽象名詞だが、influence に形容詞がついて、そういう特定の影響を及ぼす、という意味になるとaがつく。動詞は have のほか exert もよく用いるが、give はあまり用いない。

「動変を見ておれば」by close watch on the movement of variation (通報課K氏)は意味は通るけれども、movement は不要。variation 自身に動きの意味が含まれているのだから。

「異常気象」abnormal weather (青森M氏ほか)が最も普通であろう。航空気象台A氏の wrong weather はノンセンス。天気にも正しいも誤りもなからう。「~を起こす程度の気象現象」a remarkable meteorological

phenomenon which results in the severe weather (予報課N氏)は原文の意味を正しく伝えているのだろうか。(the severe weather の the は不要、severe も適当でない、また remarkable も弱い)。もっとも原文も少しあいまいであるが、ここでいう「異常気象」とは大雨とか大雪というような異常な局地的な気象現象をさし、「気象現象」というのは一般的な気象状態をさしていると見れば such meteorological conditions as will bring about abnormal weather など。

「20~30日前から」in 20 to 30 days advance (通報課K氏)は 20 to 30 days in advance (横浜T氏)とすべきもの。このあたりを青森M氏は we can give a 20 or 30 days prediction としたがこれは無理。prediction 20 to 30 days in advance とすべきもの。高松M氏の complete understanding should make possible to 20-or 30-day forecast the abnormal weather も無茶な英語である。make のあとに it を入れなくてはならないが、to forecast を分割して中に20-or 30-day のような句を入れると forecast は名詞かと思ってしまう。20 to 30 days in advance として最後に入れる。

ところで、この文章の構造上の一番の問題点は、中ほどの「逆に」のところ、因果関係を裏返しにしていることである。いろいろな訳しかたがあると思うが、ここはあまり力まずに訳してよいのではなからうか。「逆に」とあるから必ず、on the contrary, in reverse などを使わなければならぬことはない。(in return は論外)。予報部N氏は Since...で始めて、we may utilize the situation in reverse, that is...としているが in reverse は無くてもよさそうである。以下同氏の訳文を基にして、やや自由にまとめてみよう。

Since the variations in the five-day mean chart for the large-scale atmospheric circulation of the mid-latitude troposphere are necessarily reflected in the conditions about the tropopause, we can, by closely following the latter, predict 20 to 30 days in advance such remarkable meteorological phenomena as will bring about abnormal weather.

\* English for the Meteorologist (4)

\*\* K. Kihara お茶の水女子大学(英語学講座担当)

—1968年7月4日受理—

水滴が直径約7,000 ミクロンほどになると落下速度は秒速30フィートよりやや大になる。このような高速度では水滴は平たくなり、やがて幾つかの小水滴に分裂する。つまり、大気中に存在し得る水滴の大きさにはある限度があるのである。

A water droplet grown up to about seven thousand microns in diameter has a falling velocity larger than thirty feet per second. At a range of this high velocity, the shape of the water droplet tends to be deformed flat, and hereafter it is shattered to several tiny droplets. This is, therefore, a critical size of water droplet which is possible to exist in the atmosphere.

気象研U氏の訳文である。応募された中ではAクラスに属するものであるが、こまかく見ると問題点が幾つかある。まず seven thousand のような大きな数は、多くの人がそうしているように7,000 とするのが普通であろう。thirty feet…も 30ft/sec. でよい。航空気象台A氏は 30ft. sec<sup>-1</sup> と書かれているが、こういう書き方もあるのだろうか。At a range of… は不用と思われる。At this high velocity でよい。ただこの場合は、はっきり決まった速度ではないので at such high velocities と複数にするほうがなおよい。to be deformed flat は、誤りではないにしても自然な英語ではないようだ。hereafter も余計な感じである。it is shattered の it は water droplet をさすのだが、and の前のクローズでは the shape of the water droplet が主語となっている。これはスタイル上おもしろくないので、the shape of を取り、the water droplet を主語にし (shape をどうしても入れたければ副詞句にして in shape として flat のあとへ入れる)、tends to be shattered との主語を共通にしたほうがよい。あるいはむしろ tends to be deformed flat and shattered…のように deformed と shattered とを並べるとよい。shattered でなく、disorganized, disintegrated を使った人があるが、こういうのは化学成分まで変えてしまうようで不適當であろう。to several tiny droplets の to は into のほうが普通。「三等分する」cut into three equal parts/「こなごなになる」be broken into fragments などの into である。tiny は、もともと tiny なのであるから tinier と比較級が必要。ここの形容詞に比較級を使ったのは航空気象台A氏だけだったのはさびしい。This is, therefore,… の This が何をさすのかははっきりしない。原文は、「あ

る限界がある」というのだから There is a critical size… とすべきところ。次の water droplet には冠詞が必要。which is possible to がいけない。which can でなくてはならぬ。possible については5月号拙稿参照。

実は、この課題文は Petterssen, "Introduction to Meteorology" の一節の和訳である。参考までに原文を示す。

When a drop grows to about 7,000 microns in diameter, the fall velocity will be somewhat larger than 30ft/sec. At such high speeds the drop flattens out and breaks up into a few smaller drops. Thus there is an upper limit to the size of the drops that can exist in the atmosphere.

二、三付言すると、flattens out の out は、われわれが英文を書く場合、なかなか出てこない語である。無くとも意味は通るのだが、これがあることによって、丸い水滴が平べったくなる感じがよく出ていると思う。upper limit の upper は、日本語では訳さなくてもわかるので省いたが、英語ではやはり入れたい語である。それは size と「大きさ」との違いから来る。日本語では「大きさに限度がある」という場合、「それ以上大きくなれない」と解されるのが普通であろう。つまり「大きさ」とは、より大なる状態への指向を imply している語であるが、size はその点では中性的な語であるため upper が必要なのである。「つまり」に当たるのが thus であるが、after all (横浜T氏ほか) は不可。That is や In other words も少しずれる。上のU氏の therefore は逆のような気がする。「割れるから限度がある」のではなく、「限度があるから割れる」のではないか。「割れるから限度があるということがわかる」ならよい。上の Thus を説明すれば By this we know that ……に当たろう。「このことから次のことがわかる」の意である。それを「つまり」と訳したが、それを Thus に戻してくれた人はいなかった

#### 次回和文英訳課題 (締切8月25日)

ATSは、150°W 付近の赤道上空やく36,000kmに地球に対して静止している。この衛星から撮影した写真は、太平洋のほとんど全域をカバーしていて、中間スケール以上の気象じょう乱に対応する雲分布をよく示している。ある瞬間の雲分布であるという点で、現在アメリカ環境科学局で多くの軌道の写真を集めて作っているエッサ3号や5号の合成写真とは違った価値がある。(土屋清、渡辺和夫) [本誌5月号より]